

# ボランティア・ニュース 第2号

## 植物標本貼りボランティア・原グループのご紹介

このグループは原松治先生に植物観察の楽しさを教わった仲間が集まっています。原先生はアマチュアの植物研究家で1981～1985年に北海道植物図鑑上・中・下（噴火湾社）、1992年札幌の植物（北大図書刊行会）等を出版された方です。

私どもは1995年に原先生が亡くなられてから、未整理のまま残された浜益方面の植物目録を、佐藤謙先生（北海学園大学）の指導でまとめました。その後、レッドデータの調査員の仲間に入れていただき、高橋英樹先生（当時北大植物園）のユルリ・モユルリ島調査に同行させていただきました。目的を持った植物観察の楽しさを深めたくて、高橋先生に課題を出してくださいとお願いし、檜山の植物に3年間取り組みました。1998～2000年、月に一度2泊3日で桧山支庁のあちこちに計22回・66日間行ってきました。その時の標本は北大植物園の標本庫に収めてあります。夏場、標本を採集し、冬季間にその整理をする生活がそのようにして成りました。

高橋先生が北大総合博物館に移られたので、このグループもこちらで活動することになりました。毎週火曜日10時から15時まで標本貼りをしています。自分達の標本整理が済むと、様々な標本を貼りましたが、昨年からは原松治先生の寄贈された標本を整理しています。コンピューターに打ち込んでリストとラベルを作り、傷んだ標本をきれいにして台紙に貼り、ビニール袋にいれます。



原先生の標本は独特で、一枚の台紙に芽生えから種子までの違った個体が貼られていたり、よく似た植物2種を比べるように貼られていたりします。標本としては邪道でしょうが、先生が迷ったり考えたりされた道筋がわかって興味深く思われます。また、様々な参考文献からの引用や、専門家からの意見が鉛筆で書き込まれています。出会った感激の言葉もあります。読みふけて仕事がかどらないこともあります。先生と歩いた日々が甦るようで嬉しく、懐かしい気持ちで一杯になります。



博物館に来ると、なんだか自分までがアカデミックになったようで良い気持ちです。もちろん錯覚なのですが、並んでいる本の背を見ただけで楽しくなります。ポスターを見て、博物館講座を受講したり、パラタクソミストの講習を受けることも出来ました。

植物園で標本貼りをしていた時は、お弁当持参でしたが、今は学生食堂でお昼を食べます。それも楽しみのひとつです。

雪が解けたので、野山歩き復活です。標本を採集したときは乾燥機に入れに来ますが、冬では貼る作業はお休みです。

このグループも初めのメンバーが少し変わりました。今は黒田シツ・高橋美智子・与那覇モト子・桂田泰恵・金上由紀の5名です。皆、健康でこの生活がいつまでも続けられることを願っています。

金上由紀（植物標本貼付）

## 博物館に思うこと

北大に博物館ができ、ボランティアの人たちが活動していることを知ったのは、私が農学部を退職して5～6年が過ぎた頃でした。農学部の昆虫学教室には、現役のころに東南アジアで収集してきた標本が、三角紙に包まれたまま標本化されずに保存されていました。農学部には新たな標本を収納できるスペースがなく、また標本室の拡大を望むことも不可能でした。欧米の大学のような大学博物館が私たちの夢でしたが、私たちの時代には実現できませんでした。

昆虫学教室に保存してあった紙包みの標本は博物館に運び込まれ、週に1～2回出勤して標本作成を続けています。新たに収集される標本もあり、この作業に終わりはないでしょう。

しかし、現在の博物館の状況を見てみると、かつて昆虫学教室で味わったのと同じような問

題が近い将来に起こるのではないかと危惧されます。博物館にとって最も重要であるはずの標本収集に関する予算項目がなく、それに要する資金がほとんど無いらしいのです。昆虫標本の例で云えば、新たに作製した標本を収納する為の標本箱が必要になりますが、それを購入できる予算項目が無い為、担当教官の研究費から捻出しなければならないとのこと。このままでは、収集してきた標本は再び紙包みのまま放置されかねません。

標本の収集、整理、保存が博物館にとってもっとも大きな事業であるはず。標本の収納に要する予算とスペースが十分に確保できることが担保されて初めて、私たちボランティアの活動の場が広がるように思います。

久万田敏夫（ボランティアの会会長）

## FAQ：これ本物ですか？

3階展示室のデスマスティルスやニッポノサウルスなどの骨格を見ると、その大きさや形に思わず「本物？」と疑ってしまいます。実を言えば、展示している骨格は「レプリカ」です。しかし偽物というわけでもありません。

化石のレプリカは、シリコンで型取りしてプラスチックを流し込んで作った極めて精巧なもので、実際の研究にも使われる品質です。そもそも化石自体、土で型取りされた骨のレプリ

カと見ることもできます。また、実物の化石は非常に重く、組み立てには向きません。

化石には欠けた部分があるので、研究者が想像して補います。展示中の標本は、質感の違いからレプリカとそうでない部分を見分けられるようにできています。レプリカの部分を見抜けるようになると、新たな発見があるかもしれません。

望月直（展示解説）

## ボランティア募集

現在、考古学グループで夏季を中心とする遺物の清掃作業（汚れ・力仕事）に1～2名募集しています。募集対象は、北大の学生および教職員

です。ご興味のある方は [ohara@museum.hokudai.ac.jp](mailto:ohara@museum.hokudai.ac.jp)（担当：大原）までお問い合わせください。

## 編集後記

◆大勢の予想を裏切らず、やはり仕事の遅かった編集長…いやいや、植物グループ特集なので花の季節に合わせたんですよ。【望月】

◆第1号が発行され第2号が何時出るのかと気をもまれて居られた方もいたことでしょう。やっと発行されました。続けることが大切です。編集委員一同、これからも努力してまいります。どうぞ、ボランティア会員の相互連絡などに、ご利用下さい。【沼田】

◆当初の予定より発行日が少し遅れてしまいましたことお詫びします。原稿を書いて頂いた皆様有難うございました。北大博物館ボランティアの皆様の視野が広まりますようにと祈っております。【星野】

## 次号予告

ボランティア・ニュースは隔月発行を予定しています。次号は、考古標本ボランティアをご紹介します。

### ボランティア・ニュース

◆編集・発行：

北海道大学総合博物館ボランティアの会

◆発行日：2005年5月

◆発行所：

博物館 ボランティア控室（N302号室）

060-0810 札幌市北区北10条西8丁目